



日本のお産を守れ!

アドバンス助産師活動レポート2

香川大学医学部附属病院 (香川県三木町)

病床数：周産期科女性診療科 59 床・母体胎児集中治療室 (MFICU) 6 床
 看護職員数 (上記病棟)：63 人 (うち助産師 42 人)
 産科医師数：13 人 (常勤 11 人、非常勤 2 人)
 年間分娩件数：614 件 (2015 年度)
 アドバンス助産師：16 人、平均経験年数 17.8 年 (全国平均 17.4 年)、平均年齢 40.8 歳 (全国平均 42.8 歳)

香川県の就業助産師数は 290 人 (平成 26 年衛生行政報告例) と全国的に見ると少ない。だが、アドバンス助産師数 92 人は、就業助産師に対して 31.7% と全国で 3 番目に高い割合を誇る。経験を積んだ助産師が多い同県だが、県内の助産師養成数は年 10 人。「平成 27 年看護関係統計資料集」を見るとそのうち県内就業は 5 人のみとなっている。助産師が不足している状況が続いている。

助産師出向のモデル事業に参加

そうした県内の助産師不足や偏在是正への協力を主な目的に、香川大学医学部附属病院は「助産師出向支援モデル事業」に出向元病院として参加した。同事業は、2013・14 年度に日本看護協会が厚生労働省看護職員確保対策特別事業として、香川県看護協会など 1 都 14 県の看護協会に委託したものだ。

出向助産師として同院から選ばれた 2 人のうち 1 人が、助産師歴 22 年目で昨年アドバンス助産師として認証を受けた市川典子さんだ。市

川さんは 1 年半前の出向時には分娩介助件数が 1,000 件を超え、すでに CLoCMiP レベルⅢの実力を持つベテランだったことから、白羽の矢が立った。出向先は、社会医療法人財団大樹会総合病院回生病院の産科で、期間は 2014 年 12 月～15 年 2 月の 3 カ月間。出向先の夜勤者不足を補うことや教育的な関わりが期待されていた。

出向で磨かれたフィジカルアセスメント能力

香川大学医学部附属病院は、大学病院ということもあり産科医は 13 人と多く、分娩時に医師が立ち会う時間も長い。助産師は分娩の進行について、医師に相談し指示を仰ぎやすい環境にある。一方、出向先の回生病院では、当時産科医が 3 人 (常勤) で、夜間は医師が当直制ではなくオンコール体制だった (当時の年間分娩件数は 479 件)。

市川さんは「そのような状況では、助産師が分娩で起こり得ることを一手に担わなければならない、どのタイミングで医師を呼ぶか、予測をしなければなりません。判断するにあたっての考え方、姿勢を学ばせていただきました」と振り返る。自施設での分娩件数は年 18 件 (15 年度) だが、回生病院では出向していた 3 カ月間だけでその半数を超える 11 件も介助したという。

CLoCMiP レベルⅢ 認証申請では、申請要件の 1 つに「分娩介助実施例数 100 件以上」という項目があるが、自施設では助産師数が多く分娩介助の経験を積むのに年数がかかる場合などは、出向という形で他施設で経験を積むという仕組みも考えられそうだ。



妊婦と談笑しながら保
健指導を行う市川さん

ポートフォリオは「思い出の掘り起こし」

同院には香川県看護協会の助産師職能委員を務める職員がいたため、CLoCMiP の導入はスムーズだった。副病院長兼看護部長の筒井茂子さん (認定看護管理者) は「ALL JAPAN で進める制度ということで賛同しました。助産師が今どのレベルにいるかという振り返りもでき、キャリアの広がりにつながったら良いと、チャレンジしてほしいと思いました」と語る。

申請要件の研修は、院内の医師や大学の看護学科に講師を依頼できた。県の補助事業の NCPR (新生児蘇生法) 研修を同院で担った際には、小児科医が申請要件「B コース以上」を超える A コースを追加で開催してくれ、インストラクター 1 人を出すこともできた。

同院ではポートフォリオを「思い出の掘り起こし」と意味付けし、過去のケースを今ならどう介入するかと振り返りつつ楽しむことができたという。すでに CLoCMiP レベルⅢの実力を持っていた市川さんの業務に変更はないというが「多くの研修を受け、新しい知識で助産診断ができるようになったと思います」と変化を語る笑顔がいきいきと輝いていた。